

大学教育における教授・学習過程と学生の 発達過程の関連（3）

指導教官決定要因の検討

佐藤 公代

（教育心理学教室）

（平成15年10月23日受理）

The Teaching-Learning Process in University Education (3)

Factor of Determining Teacher's Consultant in Graduation Thesis

Kimiyo SATOU

（問題と目的）

本論は、佐藤（2001，2004）の「大学教育における教授・学習過程と学生の発達過程の関連（1，2）」において、「教育心理のカリキュラム」との関連で、卒論指導教官決定要因について検討することを目的にする。1974年赴任以来、29年間の卒論指導において、どんな要因で、学生は指導教官を決定するのか、常々疑問を抱いていたので、この辺で観察法を用いて要因分析を試みようとする。

仮説は次の通りである。

- （1）考えられる要因には、大きく分けて、教官側の要因、学生側の要因があるだろう。
- （2）具体的には、研究内容、教官の人柄、指導の仕方、研究室の雰囲気、学生の性格、友達関係、研究の流れがあるだろう。

（方 法）

- 1）観察時期：1974年から2004年（年度とする）
- 2）対象者：心理専修以前の学生と心理専修生（2004年度の学生まで）
- 3）観察法：自由観察を用いた。記述の際、教官名については、a, b, c, d, e, f, g, h, i, j と一定しない記述の仕方とする。筆者自身に焦点を当てて考察する。理由は、他の教官の批判にならないようにするためである。

(結果と考察)

表1に1975年(昭和50年) - 2004年(平成15年)度における筆者による卒業論文指導生の人数とその割合(%)を示す。

1974年 - 1977年までは専修制度でなかったため、教員養成課程の学生が自由に教官を選んできた。筆者は「児童心理学」を教職で行っていたので、ほとんどの学生が教員志望で、「児童心理学」で卒業論文を書く学生が、1975年 - 1977年度にかけて、合計16人いた。平均すると、4 - 5名はいたと記憶している。

表1 1975年(昭和50年) - 2004年(平成15年)度における筆者による卒業論文指導学生の人数とその割合(%)

年 度	教育心理専修の総人数(人)	指導生の人数(人)	%
1975 - 1977	専修制度でない	16	-
1978	19	3	16
1979	18	2	11
1980	17	3	18
1981	15	3	20
1982	21	4	19
1983	19	5	26
1984	22	5	23
1985	20	5	25
1986	19	5	26
1987	16	3	19
1988	18	4	22
1989	18	5 (i教官在外研究のため 4人途中から)	28
1990	14	4	29
1991	15	4	27
1992	13	3	23
1993	15	4	27
1994	16	4	25
1995	16	4	25
1996	15	4	27
1997	16	2	13
1998	16	1	6
1999	11	6 (j教官転出のため二人 移動してきたため)	55
2000	12	5	42
2001	12	2	17
2002	8	1	13
2003	8	1	13
2004	9	1	11

1978年から専修制度になって、心理学教室に約20名配属され、5人の教官で大体同じ人数に分け、指導した。第1希望から第3希望まで書かせ、第1希望が多い場合は、第2、第3希望に移動してもらい、そこで卒論を書かせた。学生がそんなに希望通りとしていないエピソードとして、次のようなことがある。1995年の指導教官決定について、ある学生が第1希望を筆者にし、第3希望にa教官と書いた。a教官がその学生をほしいと言ったので譲ってあげた。そんなに違和感なく、その学生は、a教官のところで論文を仕上げた。1997年までは、「児童心理学」分野で論文を書く学生が多かったので、4-5人はみれた。そのおかげで、絵本の挿絵研究が継続研究になり、そのアイデア作りに奔走したなつかしさがある。筆者が共同研究方式をとった理由には、次のようなことがある。現場をかりる場合、できるだけ方法を確立してやった方が、やる方もやられる方も条件的にいいのではないかと、迷惑度を少しでも減らせるのではないかということからである。

1998年から臨床心理学分野、社会心理学分野が脚光をあび、そこに殺到するようになった。その時は、第1希望だけで、学生の希望通りにしようという教官の申し合わせでそのようになってしまった。かろうじて、1人確保できたものの、そこでショックを得て、なぜ、減ってしまったのか、自分の研究が否定されたのか、人柄がだめなのかといろいろ考えた結果、研究の幅を広げようと思った。そのおかげかどうかわからないが、1999年は6人（最初4人だったが、b教官の転任により、2人移動。ただし、その2人は筆者のところに第1希望にしたかったが、あまりに多くなるので、そのb教官のところになった。）にもなり、おかげでいろいろな論文が書けた。その時は、学担教官でもあり、基礎セミナーもやった年である。c教官に2人の統計処理指導をしていただいた。2000年も5人様々な論文が仕上がった。2001年は2人だった。最悪は、2002年0人だったが、d教官の3人の中から1人譲り受けた。その学生がd教官を第1希望にしていたが、備考欄にどの先生でもいいと書いてあったので、臨床分野の教官が赴任するまで筆者が面倒みることになった。その学生に、それまで指導した研究については、紀要論文に書かせた。大学院希望だったのでその学生の論文数かせぎに貢献した次第である。2004年は1人積極的に選んでくれた。

次に、以上の筆者に関する経過報告からわかったことであるが、いくつかの要因が見つかったのである。それを列挙する。

- (1) 研究内容が一致しているかどうかで決めている。
- (2) 研究内容が一致していなくとも、相性が合うかどうかで決めている。
- (3) 指導の仕方が厳しいか、やさしいかで決めている。1998年の1人と1999年の3人は、指導がやさしい筆者のもとを選んでいる。
- (4) 指導の仕方が1対1か、1対多数かで決めている場合もある。e教官のところの1人は、学生が多いと比較され、マイペースでやれないので、学生の少ない教官のところを指導してもらっている。
- (5) 研究室の雰囲気において、縦の関係重視か、重視しないかで決めている。現代の学生は縦の関係結びが下手だと言われている。縦の関係が嫌であるが、もう一人の学生と一緒にということなので、研究テーマが同じf教官のところを指導してもらっている。
- (6) 学生の興味・関心が、「幼児心理学」、「児童心理学」、「青年心理学」から「臨床心理学」、「社会心理学」に移った現在は、その希望者が多いため、上限3人と決めている。教官の負担にならない限り、決めなくとも筆者は思っている。8人定員の中で、偏りが

でも仕方のないことである。

- (7) 友達関係で選ぶ場合がある。1999年6人のとき、g 教官だけとしか書かない学生がいて、その学生がいくから、行けないと言って、筆者のところにきた2人がいる。2000年の5人も仲良し通しが集まって筆者のところにきた。
- (8) 学生の性格と教官の性格が関係している。相性とは少々違う観点である。例えば、筆者のところには、素直、真面目な学生が多い。類は友をよぶのかどうかかわらないが、癖のある学生はいないようである。教官が単純で真面目、裏表がないので、それに見合った学生が選択してくれるのかも知れない。誤解のないようにして頂きたいのは、筆者以外の教官のところは、問題ありの学生がいるということではない、ということである。筆者以外の教官のところの学生については、観察不足としておく。理由は、差し障りがあると困るということである。ただ、何となく、学生の雰囲気、どの教官を選ぶかは、直観でわかってきた。その点、科学的に証明しなければならないだろう。
- (9) 学担教官で基礎セミナーをやったかどうかでも関係してくる。筆者の場合、1999年に学担生をかかえていた。そのときの態度がよかったのかどうか、結果的に11人中6人(55%)も選んでくれた。しかし、2004年には、同じように接してきたが、1人しかいない。それでも第2希望が3人いたので、接し方は悪くなかったのであろう。2000年と2001年の学生は、学担教官を避けてきた。理由は、その1年間の教官たちのやり方を知りすぎ、飽きたのかも知れない。学生というのは、ちょっとしたことで、教官を批判する場合もあるのである。2002年の学担教官のところには、8人中4人(50%)もいた。それは、相性も良く、テーマもあっていたようである。
- (10) 授業とのかかわりもある。2000年の共通教育は教育学部生対象だったので、心理の学生も受講してくれた。また、「児童期の諸問題」の授業も活気づいていた。最近は、「児童期の諸問題」の授業は、あまり活気づいていない。この点は反省すべきである。「発達と学習」の教職については、教員養成の学生と“新課程”の学生とを筆者とh 教官が交代でやっているの、その年にやって興味のある学生は選んでくれると思う。2004年の学生には、「発達と学習」の授業は行っていないし、「児童期の諸問題」も活気づいていなかった。その点、h 教官は、教職の授業をわかりやすく、また、その教官のもう二つの授業にも学生が興味をもってやったので、学生数も増えたのであろう。なお、今年から、1回生の後期だった「心理学文献講読」を前期に行っているが、これは、心理学の概論をしているので、筆者の専門ではない。「臨床心理学」、「社会心理学」、「発達心理学」、「認知心理学」、「行動心理学」、「生理心理学」と多岐に渡っている。その中で、やはり、人気のあるのは、「臨床心理学」、「社会心理学」である。

指導教官の時期までに教官全員が学生に何らかの形で授業をしておいた方がよいと思い、打診してみたが、前倒しの見解に同意してもらえなかった。さらに、「心理学文献講読」の授業を5人で3回ずつやったら、教官全員1回生の前期に授業ができ、学生も教官もお互いに分かり合えて良いだろうと思い、提案してみたが、若い教官一人の賛同しかえられなかった。今までたくさんの学生の指導をしてきたから休ませてほしいというのなら、それもそれで理由になるだろう。ただ、指導していないから、学生が来ないんだという言い訳には筆者自身したくないと思う。学生が少なくなったら、これでいいんだとあきらめられないで、来てもらう工夫ということは必要であろう。今後、どのような方向になるの

か皆目わからないが，研究，教育を大事に人間性も磨いていかなければならないだろう。
魅力ある大学作り，研究，教育作り，人間作り，と課題は山積みである。

以上，10個の要因を列挙した。ここから，仮説(1)(2)は支持される。

(今後の課題)

列挙した要因10個の構造化を図って，面接法，調査法で実証する。

(引用文献)

- 佐藤公代 内田伸子 2001 大学教育における教授・学習過程と学生の発達過程の関連 - 集中講義の授業評価
による教授・学習過程の検討 - 愛媛大学教育学部紀要 第1部 教育科学 第47巻 第2号 1 - 20
佐藤公代 酒井千尋 2004 大学教育における教授・学習過程と学生の発達過程の関連(2) - 教育心理の力
リキラムに関する検討 - 愛媛大学教育学部紀要 第1部 教育科学 第50巻 第2号 53 - 61